

# 目次

## CHAPTER 1 ようこそ「簿記」の世界へ 9

1-1 □「簿記」のルーツを探る	10
その1 ●bookkeepingの訳語が「簿記」	10
その2 ●複式簿記の成立は中世イタリア	11
1-2 □「簿記」の目的を考える	12
その1 ●なぜ複式簿記が誕生したのか	12
その2 ●複式簿記を行なう目的	13
その3 ●複式簿記の利用価値はどこで発揮されるのか	14
1-3 □簿記にもいろいろな種類がある	16
その1 ●「単式簿記」と「複式簿記」	16
その2 ●江戸時代にもあった複式簿記!?	17
その3 ●「企業簿記」と「非企業簿記」	18

## CHAPTER 2 貸借対照表と損益計算書 21

2-1 □財政状態を示す3つの要素	22
その1 ●財政状態は資産・負債・純資産で表示する	22
その2 ●お金の運用状態を示す「資産」	23
その3 ●いずれは返す借金やツケが「負債」	24
その4 ●資本金と利益から成る「資本金」	24
その5 ●資本等式「資産-負債=純資産」を覚えよう	25
2-2 □財政状態(ふところ具合)を示す「貸借対照表」	28
その1 ●「貸借対照表」の基本構造をマスターしよう	28
その2 ●簡単な貸借対照表を作成してみよう	29
2-3 □経営成績(儲かり具合)を示す「損益計算書」	34
その1 ●「収益」と「費用」の差額が利益	34
その2 ●「損益計算書」の基本構造をマスターしよう	35
その3 ●簡単な損益計算書を作成してみよう	37
2-4 □「貸借対照表」と「損益計算書」の関係をつかむ	40
その1 ●儲かっているのに金がないなんて	40
その2 ●2つの決算書に登場する当期純利益	41
[報告式の損益計算書とは]	47

## CHAPTER 3 簿記上の「取引」とその処理 51

3-1 □「取引」の意味とその種類	52
その1 ●取引は勘定科目で記録する	52

その2 ●注文しただけでは「取引」にならない?	53
その3 ●もたらす効果によって分類される「取引」	57

3-2 □取引を記録するためのルール	62
その1 ●何がどれだけ増減したのかをみる「取引の分解」	62
その2 ●取引の8要素とその組み合わせ	63
その3 ●分解結果を整理して記録する「仕訳」	69

## CHAPTER 4 仕訳帳・伝票と総勘定元帳 73

4-1 □帳簿の主役「仕訳帳」と「総勘定元帳」	74
その1 ●帳簿にはどのようなものがあるのか	74
その2 ●仕訳を記録する「仕訳帳」	76
その3 ●勘定科目ごとに整理する「総勘定元帳」	82
4-2 □伝票を利用する仕訳の方法	94
その1 ●伝票にはどのようなものがあるのか	94
その2 ●「伝票」から「総勘定元帳」への転記	101

## CHAPTER 5 決算手続きの手順と進め方 110

5-1 □決算とは何だろう	110
その1 ●決算が行なわれる理由	110
その2 ●決算手続きの流れをつかむ	111
5-2 □元帳の記録ミスをチェックする「試算表」	113
その1 ●試算表の役割	113
その2 ●試算表の種類とその様式	114
5-3 □決算手続き全体を概観する「精算表」	120
その1 ●精算表の役割	120
その2 ●精算表のしくみと作成方法	121
5-4 □帳簿の締め切りと財務諸表の作成	127
その1 ●帳簿の締め切り	127
その2 ●繰越試算表の作成	131
その3 ●損益計算書と貸借対照表の作成	132

## QUESTIONの解答・解説 143

CHAPTER 2	144
CHAPTER 3	148
CHAPTER 4	150
CHAPTER 5	154

## ● CHAPTER 1 ●

ようこそ「簿記」の世界へ

- 1-1 「簿記」のルーツを探る
- 1-2 「簿記」の目的を考える
- 1-3 簿記にもいろいろな種類がある

## prologue

日本では、明治時代に入って欧米から導入された「簿記」ですが、そのルーツをたどっていくと、14世紀のイタリアまでさかのぼることができます。つまり、簿記のルーツは、ルネサンスの起源とほぼ一致しているわけです。これは、羅針盤の発明に代表される航海技術の発達、商業活動の範囲を拡大したこととも、大いに関係しています。

## その1 ●bookkeepingの訳語が「簿記」

あなたはこれから簿記の学習を始めるわけですが、最初に、そのルーツを探ってみることにしましょう。

「現代の簿記」というとき、これは「複式簿記」を語ることにほかなりません。もちろん、後述するように「単式簿記」というものもありますが、これはこづかい帳や家計簿といったものと同じようなものであり、企業で行なわれる複雑な取引を扱えるようなものではありません。したがって、あなたがこれから学ぶ簿記といえば、まさしく「複式簿記」のことですから、この複式簿記の起源を紹介することにしましょう。

さて、まず、日本で初めて「簿記」という言葉が登場したのはいつ頃のことなのかを調べてみましょう。簿記という語が日本で初めて登場したのは、明治6年(1873年)12月に大蔵省から出版された『銀行簿記精法』といわれます。これは、当時の大蔵省の招きで来日していたアレキサンダー・アラン・シャンドの銀行簿記に関する講義内容をまとめたもので、現代の銀行簿記の基盤を成したものとされています。

ところで、これより半年早い同年6月に、福沢諭吉はアメリカの簿記のテキスト『Common School Bookkeeping』という本を訳出していますが、このときは『帳合之法』として出版しています。つまり、簿記という言葉が登場する以前は、日本では、「帳合」という言葉が広く用いられていたのです。それが『銀行簿記精法』以降、英語のbookkeepingの翻訳語として「帳簿記録」「帳簿記入」が当てられ、その4文字の中の2文字を取って、「簿記」という言葉が誕生したのです。

余談ですが、簿記という言葉が生まれたばかりの頃は、日本語の表記方法からすれば、たとえば「書を読む」が「読書」となるように、「簿に記す」から「記簿」とするのが正しいという意見もあったそうです。

## reference

シャンド  
(Alexander Allan Shand  
1844~1930)  
イギリスの財政官で、大蔵省の招請により、1872年(明治5年)大蔵省紙幣頭附属書記官となる。大蔵省官吏や第一国立銀行行員に簿記などを教授するとともに、わが国初の銀行監査を実施するなど、銀行事務全般の改善に尽力した。

## Tフォーム

複式簿記では、取引の記録や整理にあたって、左右対称のT字形の様式を用いるが、これをTフォームという。

## reference

パチオーリ (Luca Pacioli  
1445?~1510?)  
イタリアの数学者で、フランシスコ派の修道士でもある。彼の著書「算術・幾何・比および比例全書」(通称「ゾンマ」)は、初めて複式簿記について記述したのものとして高い評価を得ている。

複式簿記の成立については大きく2つの説があって、古代ローマ説と中世イタリア説に分かれます。ところが、古代ローマ説は具体的な史料が発見されておらず、あくまで推定にすぎません。そこで、一般には、中世イタリアが複式簿記のルーツとされています。

具体的には、フィレンツェのフィニー商会の帳簿(1296~1305)や、ジェノバ市財務官の帳簿(1340)に、現代複式簿記の原型を認めることができるかとされています。特に後者の帳簿では、左右対称のTフォームを用いて各取引の記録や整理を行なっているところから、通説ではこちらが複式簿記の最古の史料とされています。

複式簿記について最初に記された書物としては、1494年にベネチアで出版された『算術・幾何・比および比例全書』があげられます。この本には、数学者で修道僧のルカ・パチオーリによって、当時のベネチア商人たちが用いていた複式簿記の方法が体系的にまとめられていたのです。しかも、発明されて間もない活版印刷技術によって出版されたものであったことから、数多くの人に読まれ、複式簿記の普及に大きく貢献しました。出版されてから100年のうちに、5か国語に翻訳されたといわれますから、当時としてはちょっとしたベストセラーといえるでしょう。

ルカ・パチオーリによって紹介されたベネチア式複式簿記は、後にイタリア式簿記法としてヨーロッパ各国に伝播し、各国独自の商習慣や法体系(課税制度)の影響を受けながら、さまざまな形式へと発展していきました。それが、明治になって欧米から日本へと流入してきたのは、前述した通りです。

以上が、複式簿記の起源ですが、中世イタリアの商業都市で発展していったところに興味深いものがあります。この点は、「簿記の目的」とも関係する話ですので、次節でさらに詳しく紹介することにしましょう。

## point of view

「簿記」という名称の由来は、bookkeepingの翻訳語である「帳簿記録」「帳簿記入」の中の2文字を取り出したものといわれる。「簿記」という言葉が生まれる以前は「帳合」という言葉が用いられており、これは現代でいう「単式簿記」に相当する帳簿技術である。しかし、実際に企業で導入されている簿記といえば「複式簿記」のことであり、その基本的な技術は、明治になってから欧米から輸入されたものである。この複式簿記の起源をたどれば、中世イタリアにまでさかのぼることができる。

# I-ii 「簿記」の目的を考える

## prologue

中世イタリアに始まった産業の活発化は、取引関係の多様化をもたらし、貸し借り関係の明確な記録が必要となりました。こうした背景の中で、今日の複式簿記の母体とされる「ベネチア式複式簿記」が誕生しました。

近代企業における取引関係はさらに多様化しており、複雑かつ膨大な利害関係を生じます。このため、①日常的な「ふところ具合」のチェックはもちろん、②一定の時点（年度末）における「ふところ具合」や、③一定の期間（1年間）における「儲けの大きさ」を明らかにし、経営判断に役立てたり、株主や銀行などに報告する必要性が生じます。

## その1 ●なぜ複式簿記が誕生したのか

### 債権・債務

「債権」とは、お金を貸した人が借りた人に対して、その返済を請求する権利を持っているように、

「財産に関して、他者（債務者）にある行為（返済など）を請求できる権利」のことである。一方、

「債務」は債権の逆で、お金を借りた人が貸した人に対して、これを返済する義務を負うように、

「財産に関して、他者（債権者）にある行為（返済など）をしなければならない義務」のことである。

### advice

中世のイタリアの金融業者（Aとする）は、帳簿を左右見開きで使い、

・Aから借りてくれた方(B)の名前と貸付額を左側のページに、

・Aに貸してくれた方(C)の名前と借入額を右側のページに

記入した。ここから、複式簿記がTフォームの取引記録を行ない、しかも、左側の欄を借方（かりかた）、右側の欄を貸方（かしかた）と呼ぶようになった。

前節で簿記のルーツを見てきましたが、次に「なぜ、簿記が行なわれるのか」という、簿記の目的について考えてみたいと思います。この点を理解していただくためには、「なぜ、中世イタリアで複式簿記が誕生し、発展したか」ということから考える必要があります。

複式簿記の成立は、一般には14～15世紀頃の北イタリアといわれますが、最古の史料とされるジェノバ市財務官の帳簿が1340年のものですから、13世紀には一般の商人たちの間で、複式簿記が利用されていたのではないのでしょうか。

さて、長きに渡った十字軍遠征時代を経て、当時のイタリア商人たちは商業圏を拡大し、大いに活気づいていました。北イタリアのベネチア（ベニスという呼びかたもある）、ジェノバといった商業都市は、地中海貿易の拠点として隆盛を誇り、「ポポロ」と呼ばれた市民団体の結成などもあって、商人たちが政治的な発言力を強めた頃でもあります。

商業が活発になるに連れ、現金・現物取引だけでなく、手形決済を含む信用取引が広く行なわれるようになりました。このため、金融業を中心として、**債権・債務**に関する正確な記録が必要となってきたわけです。すなわち、「貸してくれた方」と「借りてくれた方」との明確な区分と正確な把握が不可欠となってきたのです。

一方、当時の大規模な企業は、共同出資による組合形態をとっていたため、ある一定期間で締め切って、各出資者に対して事業結果を報告し、

利益を公平に分配する必要がありました。そこで、実際には継続している事業活動を、帳簿上いったん締め切って、その時点で所有する財産や、営業成績の詳細な報告を行なうことが求められるようになったのです。

以上のような時代的要請を受け、現代の複式簿記の母体とされるベネチア式複式簿記が誕生しました。ここでは、取引の歴史的・備忘的記録を記す「日記帳」、取引の貸方要素と借方要素の分解を表わす「仕訳帳」、そして、すべてを統合した「総勘定元帳」という3つの帳簿体系が確立されたのです。

## その2 ●複式簿記を行なう目的

複式簿記が誕生した時代背景を理解していただいたところで、あらためて簿記の存在理由、目的を考えてみたいと思います。

簿記は経済（営業）活動に伴って生じる財産の変動を、帳簿を利用して組織的・体系的に記録する技術・方法のことです。そして、中世イタリアがそうだったように、企業の利害関係者（取引先、債権者、債務者、出資者など）が増えるにつれて、複雑・膨大な取引を正確かつ効率的に記録する方法が要請され、その結果、複式簿記が誕生・発展したわけです。

その主な目的を整理すると、次の3つになるでしょう。

- ① 日常の営業活動から生じる財産の変動を組織的に記録する。
- ② 一定の時点における、企業の財産状況（**財政状態**と呼ぶ）を明らかにする。
- ③ 一定の期間における、企業の損益状況（**経営成績**と呼ぶ）を明らかにする。

①については、これまであまり触れてこなかった点ですが、②や③の目的を達成するための手段と位置づけられます。つまり、日常の営業活動に伴う財産の変動が把握できなければ、一定時点の財政状態や一定期間の経営成績を明確にすることなど、到底できなくなるからです。

それなら①の「日常的に財産の変動を記録する」ことは、②や③の手段としての意味しかないのでしょうか。そうではありません。